

## 主のみこころならば

エフェソの長老たちとの涙の別れの後、パウロ一行はミレトスを離れ、コス島に直行し、次の日にはロドス島に、それからパトラに着いた。パトラは大きな港町で、彼らはここで地中海を横断する大きな船に乗り換えフェニキアのティルス（ツロ）を目指して出帆した。

船は春のおだやかな地中海を約五日間航行した後、やっとティルスに入港した。積み荷の陸揚げのために時間がかかり、パウロ一行は七日間滞在することになったが、それは彼らにとって思わぬ休息の時となり、またティルスの信徒たちとの初対面ながらも、祝福に満ちた交わりの時となった。ティルスの教会の信徒たちの中には特別に聖霊の賜物を与えられている人がいて、彼らは聖霊によって、エルサレムでパウロを待っているであろう危険を示されて、エルサレムへは上っていかないようにとしきりにパウロに注意した。

パウロはすでにそれを予感していたが、しかし彼の決心は堅く、一行は再び乗船し次の港プトレマイオスに行き、それから更に南下して、大きな町カイサリアに到着した。そこには、初期の福音の拡大及び教会形成に多大の貢献をした「例の七人」（使徒6章参照）のひとりである伝道者フィリポとその家族が住んでいた。

フィリポの家に幾日か滞在している間に、アガボという預言者がユダヤから下って来た。アガボは御霊の啓示を受けて、パウロに、エルサレムで彼を待ち受けている苦難について警告した。しかも「このように」と言って、パウロの帯を取り、それで自分の手足を縛って見せた。その演技による警告は真に迫るものがあったので、パウロの同行者であるルカたちも、この度は非常に心配し、土地の人々と一緒になって、エルサレムには上っていかないようにとパウロに願いつづけた。

これに対してパウロは答えて言った。「ほいたり、わたしの心をくじいたり、いったいこれはどういうことですか。主イエスの名のためならば、エルサレムで縛られることばかりか死ぬことさえも、わたしは覚悟しているのです」（13節、20:22~24も参照）と。何とちから強い、心打つ言葉であろうか。

神から与えられた使命のために、一步も後に引かないパウロの不退転の姿は十字架に向かわれる主イエス・キリストのお姿を思い出させる。人々の心配や弟子たちの反対と忠告を振りはらって、メシアとしての使命を果たすために敢然とエルサレムに上って行かれた主イエスのお姿のように、パウロも、そのように、彼を引き止めようとする人々の懇請を退けてエルサレムに上っていくのである。

パウロの決心のあまりにも堅いことを知って、カイサリアの弟子たちもルカやその他の同行者たちも「主の御心が行なわれますように」と言っただけで、それ以上、何も言わなかった（14節）。「主のみ心になるように」というのは“あきらめ”の気持ちではない。それは、どんなことが起ろうと、どんな事態になろうと、神のみ心に従うという、神のご主権とみ旨に対する絶対的信頼と従順の姿である。主の御心であれば、苦難でさえも忍び、担っていかうとするキリスト者の信仰の表明である。

ヨーロッパやアメリカ人は手紙の最後に「またお会いしましょう」と書いた後、しばしば「D.V.」というサインを記す。これは「デオ・ボレンテ」すなわち「神のみ心ならば」というラテン語の略語である。キリスト者は、一日一日を信仰をもって全力投球し、許される限りベストを尽くして生きる。そして、どのような結果が待ち受けようと、神のご主権とキリストにおける愛と真実を信じ、決して失望せず、神のみ心にゆだねて生きるのである。ここにキリスト者の平安と力と希望の根拠がある。